

Re:Re:Re:城下町ホールの特



大津久典
建築設計計画研究室

はじめに

私は今回の卒業設計において、公共建築における公共空間、公共性とは何かということ考えた。本来、市民に愛されるべく生み出された公共建築も、経済不況の昨今では『ハコモノ』と揶揄され、建設の際には多くの反対意見が寄せられている。小田原城を望むこの場所も平成17年に『城下町ホールエスキースコンペ』が行われ、山本理顕氏が設計者に選出されたが、実施設計まで完了した段階で計画が打ち切られるという事態が起きた。理由としてはお金のことや景観のこと、さらには政治的背景。ひとつつながることの大切さが再認識されたいま、人々が集まる公共建築のありかたについて実験的提案を行う。

コンセプト

都市的なスケールでつくられるホールは街におけるシンボルでありながら、その空間の性質により閉鎖的になりやすい。そのため、周囲の街並や市民の日常に接してながらも切り離されがちである。私の提案は、ホールの巨大で閉鎖的な壁をヒューマンスケールや周囲の建物のスケールを用いて分解し構成することで、ホール内の活動が周囲へとにじみ出し緩やかにつなぐというもの。活動のつながりは公共空間をより豊かなものとする。

ダイアグラム

1.壁

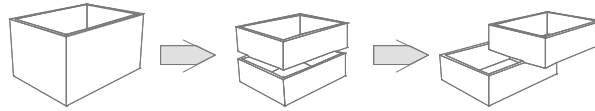
壁はただひとつでは単一の空間領域を示す要素だが、ずらしながら組み合わせることで、ふたつの空間をつなぐ要素となる(図-1)。この操作とヒューマンスケールを用いて巨大で閉鎖的なホールの壁を分解する。

2.モジュール

今回用いた主なモジュールは2250mm。これはル・コルビュジェが考案し丹下健三氏が日本人向けに改良した「丹下モジュール」から引用している。コルビュジェが描いたスケッチのように、手を伸ばせば届くほどの高さしかないが壁の向こうの気配を感じとれる高さでもある。(図-2)

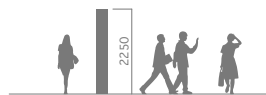
3.壁の平面スケール

壁の平面スケールは周囲の建物とホールの大さを比較することで導かれる。敷地の中心(図心)を基準とし、周囲に面する建物とホールとの大きさを比較しグラフ化すると図-4が現れる。これを変換し敷地図に重ね合わせたものが図-5である。この図-5が壁の平面スケールを決める基準となり全体が構成されている。



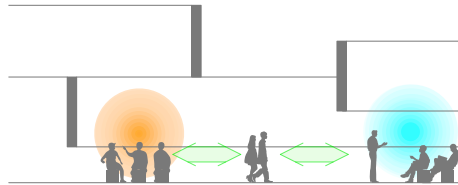
<図-1>

空間の領域を示す壁
ずらしながら組み合わせることで、ふたつの空間をつなぐ



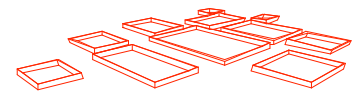
<図-2>

『丹下モジュール』から引用した2250mmのモジュール

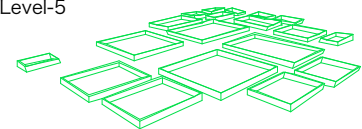


<図-3>

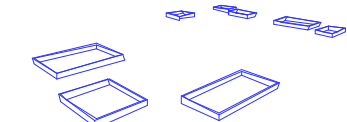
ひとつの活動の気配や領域が壁を介して周囲へとにじみだす



Level-5



Level-4



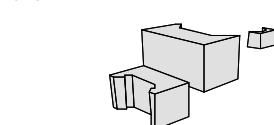
Level-3



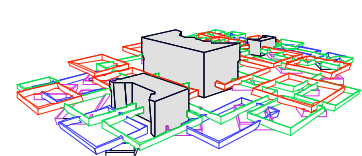
Level-2



Level-1

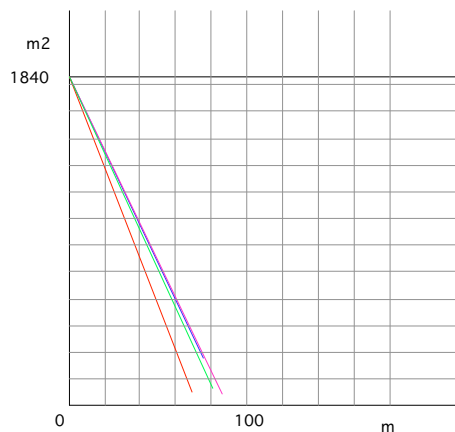


Fly Tower

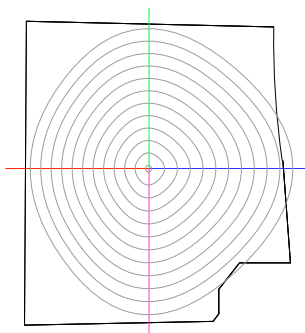


<図-6>

全体構成透視図



<図-4>



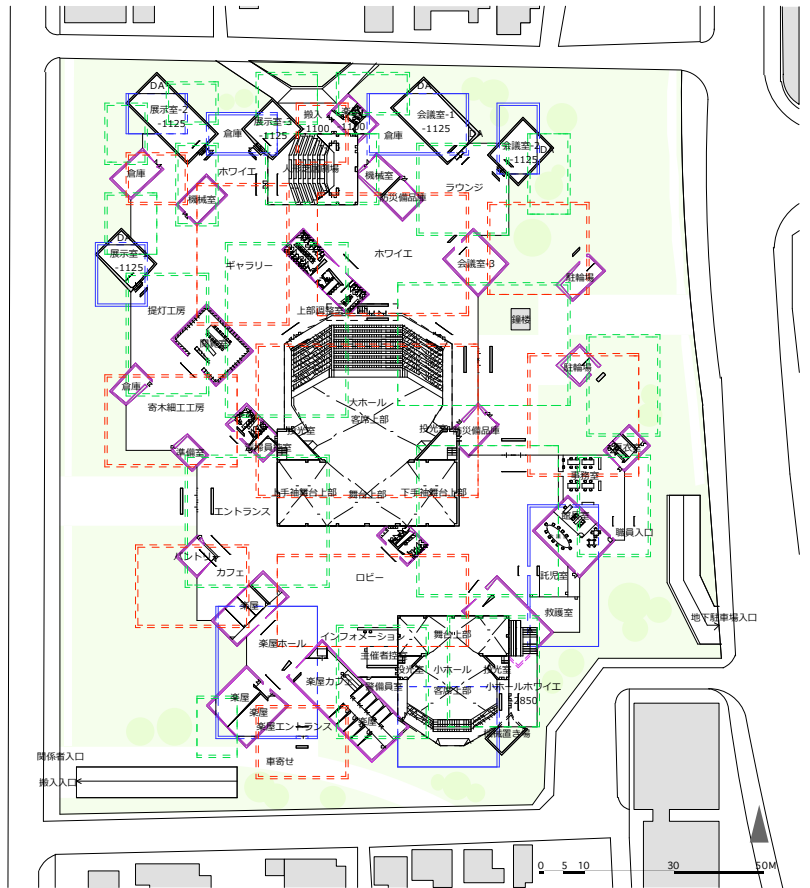
<図-5>

プログラム

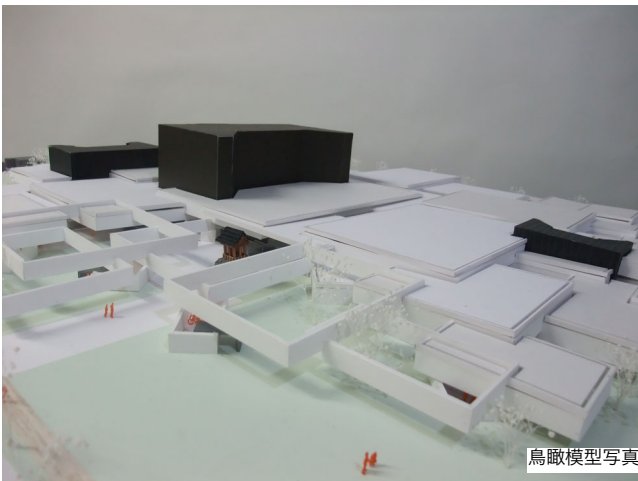
周囲の住宅や東西へのひらき、フライタワーの高さを考慮しステージは地下へと下げ、地上階は裏のないプランとなっている。施設内での自然なひとの流れを生み出すため主要動線を設定し、建物全体を巡れるように計画している。また、この動線は敷地内を貫く小田原城の正規登城ルートに対応している。ホール機能のほか、地域児童の文化学習や観光客の利用も考慮し、地域の伝統工芸や芸能を学び体験できるエリアも設定している。

デザイン

壁はすべて白で統一し、それ以外の要素に色や素材感を与えることで、壁の存在を強調し、また、屋根との接続部に設けたスリットも同様の効果をあたえる。ホール外周部には地元の工芸品である寄木細工に用いられる六角麻葉の文様、フライタワーの外装にも地元の工芸品である鋳物を用いることで、公共建築としての地域の特色とシンボル性を高めている。全体を彩度の低い色を用いることで城下町としての景観づくりにも配慮している。



1階平面図



鳥瞰模型写真



提灯工房よりギャラリーをみる



ラウンジよりホワイエをみる